

世界自然遺産「白神山地」の麓で展開する防災・環境保全・観光振興に繋がる活動

青森県立木造高等学校深浦校舎・青森県深浦町・白神の生き物を観察する会

はじめに

この度は、名誉になる素晴らしい賞を戴き、心よりの御礼を申し上げます。

私たちの暮らす青森県深浦町は、世界自然遺産「白神山地」の麓にあります。広大なブナ林を源とする河川とその周辺には、融雪や大雨で数多くの流倒木が発生します。今回の取り組みは、護岸を破壊したり、土石流などの自然災害を誘発したりする、この流倒木や溪畔の不要木などを回収し、木材チップとして再資源化する活動です。

このチップを、県内有数の観光地「白神十二湖森林セラピー基地」の遊歩道に敷き詰めることで、土砂の流出を防ぎ、オーバーユースによるブナの森へのダメージを和らげる効果を狙っています。同時に、天然木のチップを使うことで、木の香りがする歩きやすい遊歩道を整備し、観光客に癒しの効果を体感してもらうのも目的です。

産・学・官・民が協力して行う活動を通して、白神山地に暮らす学生や町民らが、環境の保全と防災、観光振興の有機的な連携の意義を学び、機会を設けて発信を続けることを心掛けています。

活動期間は2014年3月から、現在に至っています。

活動のきっかけ

「白神山地」は、青森県南西部と、秋田県北西部に広がる、山岳地帯の総称です。全体面積は、およそ13万ヘクタール。このうち、ブナの森を中心とする約1万7千ヘクタールが、1993年12月に、屋久島と並んで日本で初めてユネスコの世界自然遺産に登録されました。

日本海に面した麓の深浦町は、面積が5万ヘクタール近くありながら、総人口は約8,400人（2015年国勢調査速報値）で、今から約50年前の1965年と比べ6割近く減少しました。地域の主な産業は農林水産業ですが、若者の都会への流出が止まらず、過疎と限界集落化の進行が深刻な事態に。活動を担う県立木造高校深浦校

舎も、生徒数減少のため9年前に、前身の県立深浦高校から各学年1クラスの校舎制に移行しました。2016年4月1日現在で、全校生徒は69人となっています。

この地域にはかつて、山を縦横に駆け巡ってクマなどを狩っていた「マタギ」や、豊かな森林資源をもとに林業王国の礎を築いた「杣人（そまびと）」たちが暮らしていました。が、近代化による主産業の転換で、森の資源を糧にした暮らしは絶滅寸前にまで追い詰められ、後継者は育っていません。

「このままでは、町内の集落が消滅し、有史以来続く伝統的な生活文化も消えてしまう」。そんな声の広がりを危惧した役場関係者と市民団体が、高校生と手を携えて始めたのが、今回の活動です。放置された流倒木や廃棄される不要木を見たマタギの親方が、「もったいねえなあ。集めれば十分使えるべ・・・」と、嘆いていたことからヒントを得ました。

次の世代へ、豊かな自然遺産や生活文化を引き継ぐのと共に、持続可能な形で資源を有効利用する取り組みとして続けています。地元の若者が中心となって展開されるこの活動が、地域おこしの起爆剤になって欲しい、という期待も込めています。

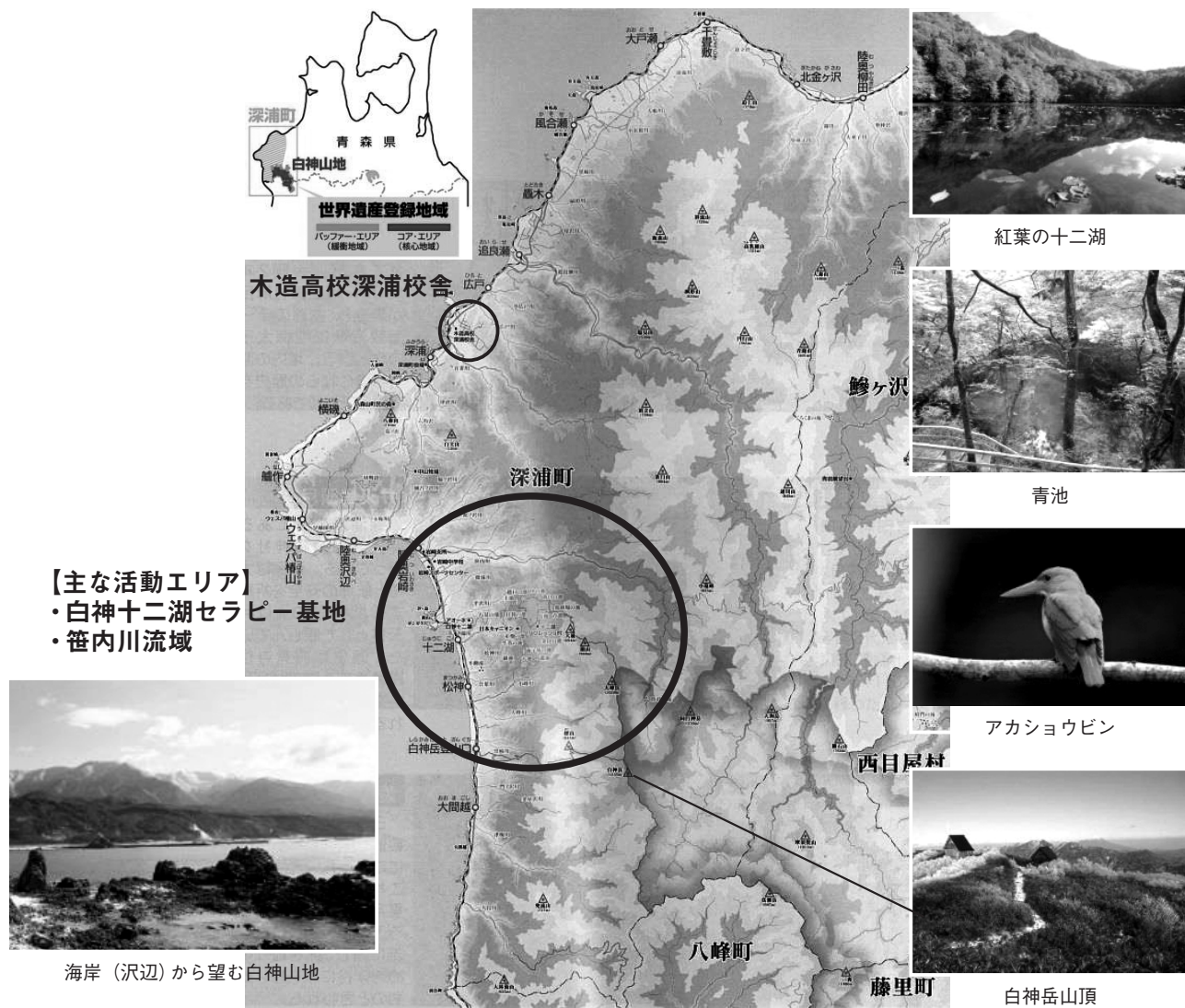
活動の概要

目的

急峻な山と、深い峡谷が連続する白神山地は、春先から梅雨時にかけて、融雪雪崩や大雨などで倒れた木が、河川に数多く流れ出ます。活動の舞台となった町内を流れる二級河川・笹内川でも、枝と根がついた巨大な倒木が、毎年のように流出し、河原などにいくつも転がっています。

流倒木は、台風などで増水した時に下流へ運ばれ、毎年のように護岸や県道などを破壊し、時には土石流などの被害を誘発する危険な存在。これらを回収して木材チップに加工し、麓の観光地などに敷き詰めるのです。

また、河川から出る不要木は流倒木だけでなく、溪



畔の保守管理や護岸の災害復旧工事による伐採木もあります。今までは、廃棄物として破棄されてきたこれらの木も、チップに生まれ変わらせ再利用します。

木材チップに加工する木は、すべてが白神山地に自生していた樹木。これを地元の観光地の環境保全に役立てることで、世界自然遺産からもたらされる貴重な資源を地産地消し、他地域からの外来種や病害虫の侵入を防ぎます。

これらの活動を行政と市民、地元の高校生らが一体となって実施し、白神山地の環境保全や防災、観光振興への意識を高めるのも狙いです。



内容

① 河川の流倒木や不要な伐採木を集める作業(6～7月)

東北地方が梅雨入りする直前の初夏の時期に、木造高校深浦校舎の全校生徒66人(2015年10月現在)が、笹内川の河川敷に転がっている流倒木を回収しました。人力で運べるものは、そのまま担いで運搬し、大きなものは持てる大きさに玉切りしてもらって、町役場が用意したトラックへ積み込みます。そして、隣県の製材業者に依頼し、木材チップにして貰うのです。高校生がボランティアで活動していることを知ったこの業者は、無償で加工してくれるのを引き受けて下さいました。

これと同じく、河畔林の伐採木や護岸などの災害復旧工事で伐採された木も、木材チップ化しています。これは、伐採や工事を請け負った地元の建設業者が提供してくれるもので、運び出しやすいように所定の場所へ積み上げてもらいました。この作業も、無報酬で手伝ってくれています。

こうして集まった木は、泥で汚れていたり、石を噛んでいたりと、製材業者の粉碎機を破壊する恐れがありました。そのため、市民団体のメンバーと高校生らが、河川から水を汲み上げて、洗い流す作業をしています。



② チップの袋詰め作業 (6～7月)

出来上がったチップは、町役場が用意した5キロと10キロ入りの土嚢袋に入れて、同校の校庭に保管、乾燥させます。この作業は、生徒のお父さんらが飲み干した、4ℓ入り焼酎の容器などを改造した、「ペットボトルスコップ」を使います。この道具は、生徒が発案したもので、できるだけ費用を使わずに、資源を有効利用する試みのひとつ。今回の作業のために経費をかけて用意した道具は、生徒が使う軍手だけでした。



③ 観光地の遊歩道などに木材チップを敷設する作業 (9月～11月)

同校の全校生徒、地元の中学生、市民団体、役場職

員らが、紅葉が始まる直前の「白神十二湖森林セラピー基地」にチップを敷設します。ここは、津軽国定公園の一部で、手軽にブナ林の散策や森林浴ができることで人気の観光地です。男子は10キロ、女子は5キロの土嚢袋を担ぎ上げて、階段状になった遊歩道などへ徒歩で運び込み、チップをまんべんなく広げます。すべて手作業で実施し、2014年は5トン、2015年は6トンのチップを撒きました。



④ 訪れた観光客から、アンケート調査 (8月、11月)

深浦校舎の生徒たちが、お盆の時期や紅葉のシーズンに、チップを撒いた「白神十二湖森林セラピー基地」や最寄りのJRの駅などで、観光客を対象にアンケート調査を実施しました。チップを撒いた道の「歩きやすさ」や「癒しの効果」、「リピート率」などのデータを収集し、それを深浦町役場へ提供しています。データを受け取った町総合戦略課は、調査の内容を数値に換算してグラフ化。これをもとに、さらなる観光客誘致への取り組み方を検討したり、関係する宿泊施設などとデータを共有したりして、地域の活性化に繋がる事業の構築に取り組み始めています。

活動の必要性・緊急性

白神山地から河川へ押し出される流倒木は、多くが放置されたままでした。それが増水で流れ出し、護岸や道路を崩落させるだけでなく、海へ到達して船舶に衝突する可能性もあります。特に危険な物は、国や県などが費用をかけて撤去していますが、破壊された護岸の修復や道路の通行止めは、毎年のように繰り返されており、一部の市民から、長引く工事への批判の声も出ていました。

一方、「白神十二湖森林セラピー基地」では、遊歩道

のオーバーユースから、表土の流出による植物へのダメージや、湖の濁りなどの懸念が。当初は、町が木材チップを購入して敷設していましたが、他地域産の原木も混ざっている状態で、外来種や病害虫の混入が心配されていました。

河川の流倒木を、白神山地の自然環境を学びながら除去することで、環境の保全と防災への意識を高めるのと共に、チップ化して観光地に撒くことで木材資源のリサイクルを完成させ、行政に任せきりにしない自然保護活動へ繋がると考えています。



活動の効果・社会への波及性

- ① 河川の流倒木を撤去することで、下流域にもたらされる可能性があった災害を軽減することができました
- ② 厄介者とされた流倒木や、廃棄物扱いされていた災害防除工事などで出る不要木を再利用することで、白神山地に連なる森林セラピー基地の環境保全に繋がりました
- ③ 他の地域産の木材チップを使用した場合に懸念される、病害虫や外来種の侵入を防ぎ、地元の木を地元の土に返すという地産地消のリサイクルの確立に寄与しました
- ④ 地元の県立高校、町役場、市民団体の協業で始めたボランティア事業に、建設業者や製材業者などが、集材やチップ化する過程を無償で手伝って下さいました。産業界にも、取り組みへの賛同者が増え続けています
- ⑤ チップ撒き作業に、町立中学校の生徒や観光ガイドらが参加しました。草の根の活動が広がります

- ⑥ 木造高校深浦校舎では、適宜、環境保全と防災教育の講義を行い、活動への理解を深めてもらう取り組みを続けています。それと同時に、活動を主導することで、生徒たちが白神山地の麓で暮らしていることに誇りが持てるよう努めています
- ⑦ 観光客へのアンケート調査では、チップの道は歩きやすいと好評です。また、観光ガイドからも、チップを敷いた遊歩道の癒し効果が絶大である、との声が寄せられています
- ⑧ 地元だけでなく、全国展開する報道機関からも取材を受けて報道されました。全国紙の学生新聞には、活動に関わった生徒たちが記事と写真を投稿して、掲載されています



活動を実施する上での留意点、工夫した点、苦労した点

河川の流倒木の中には、生態系を維持するために欠かせないものや景観上必要なものがあります。回収する木は、これらを十分に留意して選定しました。

また、活動には、地元で伝統的な狩猟採集を行ってきた「マタギの親方」から指導を受けました。森の民である親方に、集めた木の種類や特徴、用途などを聞いたり、ロープを使って木を運搬する方法を教えて貰ったりしました。高校生たちに、「自分たちの祖先がどのように木を利用し、山と関わって生きてきたか」を伝える工夫のひとつです。

同時に、環境保全と防災に関する事前学習も行い、この取り組みを肉体労働だけの活動に終わらせず、「世界自然遺産・白神山地の麓に生きること」の意義を考えるきっかけになるよう努めています。

観光客へのアンケート調査では、チップ撒きをした学生が、情報収集や分析するのと同時に、自分たちの活動を外部へ伝えていく機会にしています。

活動を始めた2014年当初、苦労したのは、原木の収集です。高校生が担うには危険すぎる作業であつたり、様々な規制で国有林内での流木集めが難しかったりしたからです。でも、2015年から、活動に賛同する町内や県外の企業、個人、そして行政が、次々と協力を申し出て下さり、2016年度は、十分な量が集まっています。

活動の今後の計画

- ① 森林セラピー基地だけでなく、世界自然遺産のコア地域以外のオーバーユースが懸念される遊歩道などにも木材チップを敷き詰めることを検討中です
- ② チップを撒く活動に町内全域の中学生や小学生にも参加してもらい、小学校の高学年以上が全員で参加できる環境保全活動を目指します
- ③ 森林セラピー基地の利用を、観光ガイドだけでなく、地域の住民が参加できるような活動に発展させます
- ④ 首都圏の大学生らにボランティアとして活動へ参加してもらい、やや危険が伴う流倒木集めの作業者の増強を目指します
- ⑤ 高校生たちが中心となり、活動を発表する機会を増やし、町内外の教育機関などへ、防災と環境保全の大切さを啓蒙していきます

最後に

この活動を立ち上げた時から支援して下さった深浦町のマタギ・伊勢勇一親方が、受賞の朗報を聞く直前に急逝されました。クマをも恐れぬ、強靱な体力と精神力で、白神の山野を飛ぶように歩いた親方も、病には勝てませんでした。享年77歳。早すぎる死を悼みます。

親方には、深浦校舎の事前学習で全校生徒に講演をして頂き、木を集める現場では、チェーンソーを使った伐採や玉切りの実演、丸太の運搬などを実地で習いました。

生徒たちも、見た目は武骨で強面ながら、内実は心優しい親方が大好きでした。腰にクマの毛皮の尻当てを着けてもらったり、マキリ（マタギの刃物）の使い方を習ったりする、マタギの授業を何よりも楽しみにしていたようです。

伊勢親方、子供たちが頑張った活動が、立派な賞を取りましたよ。

これもすべて、親方のご指導のおかげです。ありがとうございました。

でも、心残りががあります。それは、この快挙の喜びを、共に分かち合えなかったことです。

でも、きっと、親方のことですから、白神山地のどこかで、微笑みながら、祝福して下さっているのでしょう。

今後も、私たちの活動を見守ってください。

ご冥福をお祈りいたします。

白神の生き物を観察する会・一同より



協力してくださった行政機関や企業、団体など

<行政>

林野庁 東北森林管理局 津軽森林管理署（青森県弘前市）

青森県 自然保護課 (青森市)
青森県 西北地域県民局 地域整備部 鱒ヶ沢道
路河川事務所 (青森県鱒ヶ沢町)
青森県 西北地域県民局 地域整備部 用地課
(青森県五所川原市)
青森県 中南地域県民局 地域連携部 弘前環境
管理事務所 (青森県弘前市)

<企業> (五十音順)

株式会社 鈴光 (本社・秋田県能代市)
株式会社 ニコン (本社・東京都港区)
株式会社 ホリエイ (本社・青森県深浦町)
株式会社 三浦建設 (本社・青森県深浦町)
株式会社 脇川建設工業所 (本社・青森県深浦町)

<教育機関> (五十音順)

町立岩崎中学校 (青森県深浦町)
町立大戸瀬中学校 (青森県深浦町)
町立深浦中学校 (青森県深浦町)

<団体>

青森県教育厚生会 (青森市)
深浦町社会福祉協議会 (青森県深浦町)

(以上)

青森県立木造高等学校深浦校舎・青森県深浦町・
白神の生き物を観察する会